

SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★

検察側の罪人	
2018年／日本映画 配給：東宝／123分	
2018（平成30）年6月20日鑑賞	東宝試写室



監督・脚本：原田眞人

原作：零井脩介『検察側の罪人』（文春文庫刊）

出演：木村拓哉／二宮和也／吉高由里子／平岳大／大倉孝二／八嶋智人／松重豊／山崎努／矢島健一／音尾琢真／酒向芳／キムラ緑子／芦名星／山崎鉾菜

みどころ

どこかで聞いたようなタイトルだが、“証人”と“罪人”とでは大違い！司法研修所で検察教官まで務めた検事が、老夫婦刺殺事件でなぜそこまで犯人逮捕に入れ込むの？そんな姿を見て、この先輩に憧れたもう1人の若手検事は・・・？

“SMA P”的木村拓哉が『HERO』の久利生公平検事とは異質の検事像を熱演するが、彼が“罪人”になっていくストーリー展開には違和感も。また、検事を辞めて弁護士になるのは自由だが、自分が取り調べた殺人事件に弁護士として関与するのは如何なもの・・・？

その他、『三度目の殺人』（17年）は例外として、私には日本の裁判モノ、法廷モノにいろいろなアラが目立つが、さて本作は？

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■口■似たようなタイトルの名作が！それと対比すると？■口■

『検察側の証人』はアガサ・クリスティの名作小説で映画化もされているが、その向こうを張ったようなタイトルをつけた『検察側の罪人』は、零井脩介の小説。「時効」をストーリーの端緒とし、検事を作品の主題として選び、取材には元検察官の郷原信郎氏が協力した同作は、「現行の司法制度の問題点を描いたすぐれて社会的な司法ミステリー」と評価されているが、さてそれを映画化した本作は？

本作冒頭、検察教官の最上毅（木村拓哉）が司法修習生を前に講義しているシーンが登場する。26期の私が司法修習をした1972～74年当時は、10組約500人で2年間の修習だったが、今は約1500人に増えている上、1年間だけの修習だから、授業の

スタイルは大きく変わっている。しかし、スクリーン上で見る授業風景がホントなら今時の修習生は恵まれたものだと感心するし、最上教官の講義内容や熱心な教え方にはなるほどと納得！そして、これを聞いていた沖野啓一郎（二宮和也）が弁護士志望から検察官志望に切り替えたことにも納得だ。

それから数年の時が流れ、最上は今、東京地検刑事部の「本部係」をしていたが、その仕事内容は？そして、新たに東京地検に検事として赴任してきたのが沖野だが、その配属先は？

■口■「法廷モノ」あれこれ。さて本作は？■口■

是枝裕和監督の『三度目の殺人』（17年）（『シネマ40』218頁）は大阪弁護士会が応援し、「弁護士は、依頼者を守るために徹底的に向き合います。」のキャッチフレーズでポスターを作ったほどの、本格的「法廷モノ」だった。しかし、昨今次々とテレビドラマ化されている法廷モノや弁護士モノ、検事モノはエンタメ色が強すぎて、私にはバカバカしく思えるものが多い。今年は松本清張の生誕100周年記念の年になるため、先日は、常盤貴子と尾野真千子が共演した『松本清張没後20年特別企画 疑惑』（2012年）が放映されたが、桃井かおりが白河球磨子役を、岩下志麻が佐原律子弁護士役を演じた野村芳太郎監督の映画『疑惑』（87年）に比べると、そのレベルの差は歴然だった。

また、木村拓哉が「中卒」の「スーツを着ない」「型破り」な検事・久利生公平を演じてハマリ役になったテレビドラマを映画化した『HERO』（07年）（『シネマ16』151頁）も、私の評価は3点で、「私の疑問その1～その4」を提示してしまった。しかして、木村拓哉と二宮和也が共演した「法廷モノ」（検事モノ）たる本作は・・・？

■口■殺人罪の公訴時効廃止をどう考える？■口■

殺人罪等の「公訴時効」が廃止されたのは2010年のこと。しかし、最上が新進検事の時代に担当した女子中学生殺人事件では、容疑者の松倉重生（酒向芳）を起訴することができず、25年の公訴時効を完成させてしまったから、最上はその悔しさをずっとひきずっていた。ところが近時、大田区で起きた老夫婦刺殺事件を最上が沖野と一緒に捜査本部に入って調べていると、その容疑者の1人として松倉の名前があったから、最上はビックリ！それは、それでいいのだが、原作でも本作でも、そこから最上が松倉を老夫婦刺殺事件の犯人に仕立てあげるストーリー作りがはじまつていくから、そこに注目！

警察でも検察でも「見込み捜査」があるのは当然だが、事件の本筋を自分の作ったストーリー通りだと決めつけ、それに適合する証拠だけを集め、逆に矛盾する証拠を切り捨てていくのはまったくナンセンス。そんなことは検察教官をしていた最上自身が一番よくわかっているはずだが、何と原作でも本作でも、それがストーリーの骨格になっていく。修習生時代から最上を尊敬していた沖野は、老夫婦刺殺事件について最上がそんなやり方を

突き進めることに疑問を抱き、反発し、次第に最上から離れていくことに。もちろん、これは“SMAP”内部の対立でもなければ、“SMAP” vs “嵐”的対決でもなく、検事としての生き方の問題だ。そんなテーマで“SMAP”的木村拓哉と“嵐”的二宮和也が対立、対決するのが本作の醍醐味だが、私にはエンタメ色が強すぎる感が・・・。

■口■検察事務官は本来影の存在だが・・・■口■

検察庁は大きく、取調べをする部と公判に立ち会う部に分かれている。そして、取調室には検察事務官が立会事務官として配属されるが、これは言ってみれば影の存在で、主役はあくまで検事だ。ところが、本作では新任検事、沖野の立会事務官として配属される橋沙穂役に吉高由里子という大物女優を起用しているから、アレレ。それは、この橋の本業が“潜入ルポライター”で、かつては某職場に潜入してベストセラー的なルポを発表したほどの能力の持ち主だからだ。そんな橋が国家試験を受けてまで検察事務官になり、今、東京地檢に配属されている（潜入している？）のは、何のルポのため・・・？

本作中盤では最上のやり方に反発した沖野が検事を辞めることになる上、最上から検察事務官をしているのは警察庁での潜入ルポのためだと糾弾された橋もその職を辞することになるのだが、いくら小説は何を書いても自由だとしても、こりやちょっとやりすぎでは・・・？

また本作では、最上の同期で弁護士から政治家に転身した丹野和樹（平岳大）が献金問題でマスコミから追い詰められていくストーリーが登場し、丹野はホテルの窓から飛び降り自殺をしてしまうが、これもちょっとやりすぎの感がある。しかも、最上が丹野たちと親しく接していたため、その面からも最上が週刊誌から注目される立場になっていくストーリーも、ちょっとエンタメ色が強すぎる感が・・・。

■口■真犯人は弓岡？そりゃマズい！しかして・・・？■口■

容疑者が浮上てくるきっかけはいろいろだが、本作で弓岡嗣郎（大倉孝二）が老夫婦刺殺事件の真犯人として急浮上してきたのは、弓岡自身が居酒屋で老夫婦殺害をほのめかす自慢話（？）をしていたため。そうなると、「松倉を容疑者として取り調べ、20日間の拘留期限のうちに自白をとり、起訴できる証拠固めをしろ」と最上から厳命され、そのための必死の格闘を続けていた沖野はどうなるの？新たに弓岡を逮捕してその取り調べを行い、松倉は釈放するの？そんなことをすれば、検察のミスとしてマスコミから叩かれることが至だ。

しかも、23年前の女子中学生殺しの犯人は松倉。そう決めついている最上は、公訴時効でその処罰を免れた女子中学生殺人事件に代えて、今回の老夫婦刺殺事件では何としても松倉を犯人に仕立て上げなければならないと考えて、すべてのストーリーを完成させていたから、そこに弓岡真犯人説が浮上してくると、そりゃマズい！私には優秀な検事であ

る最上がそんな風に考えること自体が不可解だが、さらに、互いに妙な信頼関係で結ばれている（？）、裏社会で銃などを売りさばくプロ一派である諏訪部利成（松重豊）に対して、使い捨ての車とケータイ、さらに拳銃まで手配を頼むシークエンスになると、アレレ・・・。使い捨てケータイを使った“ある話”から弓岡を誘い込み、車に弓岡を乗せた最上は、伊豆の山奥にある別荘に弓岡を連れ込んだが、最上はそこで一体何を？

■□■後半は“検事” vs “弁護士”としての対決に！■□■

本作前半は、木村拓哉と二宮和也が先輩・後輩の検事として互いに理想を追い求めながら、老夫婦刺殺事件の処理を巡って、全く違うタイプの検事として対立する姿が描かれる。もちろん、観客には真犯人が誰かはわからないが、最上検事のやり方の強引さが目立つのは明らかだし、松倉を犯人に仕立て上げるストーリーを組み立て、それに沿った証拠固めだけを進めていく手法に納得できないのも当然。そして、最上が“検察側の罪人”になっていくシークエンスはあっと驚かせるものの、どうしても、そんなバカな？と思ってしまう。前半の山場が終わると、後半からは一転して、橋が検察事務官の辞任を余儀なくされるほか、沖野も検事を辞任してしまうことになるのは、ある意味仕方がない。しかし、検事を辞めた沖野が今度は松倉の国選弁護人となった小田弁護士に接触して積極的な情報提供（？）をしたり、証人になることを要請したりするのは如何なもの・・・？

これによって、本作後半は前半の検事同士の対決から、小田弁護士やさらにそのバックにいる大物の人権派弁護士、白川弁護士（山崎努）を介して、最上検事 vs 沖野弁護士の対決という構図が続くことになる。しかし、そこまで“SMA P”的木村拓哉 vs “嵐”的二宮和也の対決にこだわる必要があるの・・・？

■□■勝者は誰？敗者は誰？正義とは？■□■

本作後半には週刊誌の記者たちも登場し、最上検事と丹野との関係や、学生時代の最上の姿等がスクリーン上に登場する形でさまざまな“種明かし”がされていく。そして、その中で「正義とは何か？」というテーマについての問題提起がさまざまなセリフの中で語られていく。もちろん、埋められていた弓岡の死体が発見された以上、あれほど優秀だった最上検事も逮捕されることになるから、結局彼も敗者に・・・。

また、当然ながら松倉は釈放されることになるため、取り調べの際に松倉に対して暴言を吐いて自白を強要していた沖野は彼に謝罪せざるを得なくなったから、こちらもある意味敗者に・・・？すると、勝者は見事に松倉の釈放を勝ち取った小田弁護士やその背後にいた白川弁護士？老夫婦刺殺事件が一件落着し、人間関係が整理されてくると、一見そんな構図になるが、その中で“正義とは？”の回答が見えてくるの？

本作ラストでは、ガラス越しに弁護の手伝いをしたいと申し出る沖野に対して、最上が「俺はもういいんだ。君にしか救えない人がどこかにいるはずだ。君が本当に救うべき人

は俺じゃない」と静かに語るシーンになるが、さあ、あなたはこれをどう受け止める？

2018(平成30)年7月5日記



『検察側の罪人』
画・王雅(2018.10)